

パークとデュボイス

——その調査方法論と人種観の差異をめぐって——

東京大学 北田 暁大

1 目的

本報告は、米社会学の基礎を作り上げた R.パークと、黒人初のハーバード大学博士号取得者でありドイツにおいて重厚な社会学を修得し、歴史的名著『フィラデルフィアの黒人』を上梓した W.E.B.デュボイスの、社会調査法の差異を検討し、初期米社会学において「人種問題」という問題系が、社会調査の方法論にいかに関接に関連していたかをあきらかにする。人種問題の偏見・態度の測定は、20年代以降60年代に至るまでの重要な社会学・社会心理学の課題であったが、それは測定を可能にする（いかにして、なにを）技術の開発過程でもあった。その端緒において都市を実験室とみる人間生態学的方法は大きな役割を果たし、『フィラデルフィアの黒人』の方法論と異なる社会調査のあり方を規定していった。デュボイスという忘れられた社会学者の方法との差異に焦点化し、制度的社会学が忘却してきた「社会的なもの」を捕捉する方法論の歴史的意味を考察する。

2 方法

ここ30年ほど、アメリカ社会学史の領域では、「いかに過去の作品を正確に解読するか」という伝統的な問いのほかに、社会学が、どのような制度的・社会的背景のなかで、いかにして成立してきたのか、を問う社会史的研究の蓄積が積み重ねられてきている。社会学が、激動する世紀転換期のなかで一学問領域として自律していく過程を追うには、大学制度の変容、財界・財団のフィランソロピー、大戦期における社会学的調査の技術の発展など、様々な制度的背景が問われなくてはならない（邦訳のあるものとしては A.アボット『社会学科と社会学』2011年、ハーベスト社等）。本報告では、こうしたオーバーシュール以来の制度史に掉さし、大学制度等を踏まえた社会学史（矢澤・伊藤『アメリカの研究大学・大学院』2008年、東信堂）の観点から、パークとデュボイスの社会的位置を考察する。またその際、I.ハッキングが明快な形で定式化した歴史的な言説分析・概念分析の方法を踏襲する。わけでも、心理学史においてハッキングの問題意識を十全に継承し、実験という社会的行為がどのように心理測定の技術や概念化に寄与したかを明らかにした K.ダンジガー（*Constructing the Subject*, 1994, Cambridge University Press）の方法論に準拠する。社会調査の歴史は、同時に「なにが／いかに調査されるべきか」をめぐると概念と技術の構築史でもある。

3 結果

パークによって定式化された人間生態学的な視座は、数多くのシカゴ・モノグラフを生み出していく重要契機となったが、よく知られるようにそれは同化サイクル理論に帰着する適応主義な進化図式を採用するものであった。本報告では、そのパークの思想の根幹に、彼がシカゴ赴任以前に従事していたブッカー・ワシントン的な「黒人の解放（適応）」観があると考えられる。ワシントンと袂を分かち、適応とは異なる（現在でいう）アイデンティティ・ポリティクスを提示したデュボイスの思想は、きわめて丹念な調査手法、確固とした理論に裏打ちされており、社会地図などのアイディアも先取りする洗練されたものであったが、アトランタ大学の退職後、王道の「社会学史」において忘却されていく。デュボイスの学史的忘却は、同時にある種の社会調査方法論の忘却でもあった。

4 結論

社会調査という社会的実践が、同時代の大学制度、大学と財団との関係、そして人種観と結びついているか、そしてそれがいかにしてアメリカ社会学の根幹をなす問いであったのか、についてあきらかにした。